追悼　館蔵品展

高井有一展

角館を舞台にした小説「北の河」で第54回芥川賞を受賞。
寄贈された自筆原稿など約50点を展示します。

東北に冬は早かつた。昭和二十年、初めて雪が来た日の寒さを私は憶えてゐる。

（「北の河」冒頭部分より）

平成28年12月3日［土］～29年3月31日［金］

新潮社記念文学館

開館時間　午前9時～午後4時30分（入館は午後4時まで）
休 館 日　月曜日（祝日は開館）、年末年始（12/29-1/3）
観 覧 料　大人（高校生以上）300円 小中学生150円
※ 団体割引あり、仙北市民無料
〒014-0311 秋田県仙北市角館町田町上丁23
電話　0187（43）3333（仙北市学習資料館共通）
主催　仙北市教育委員会
協力　中村輝子氏

2015.12.10 『時のながめ』取材を受ける高井氏
（中村輝子氏提供）

高井有一　たかい・ゆういち

1932.4.27-2016.10.26

東京生れ。成蹊高等学校で中村草田男の授業を受け、成蹊大学に進学。1952 年、早稲田大学第二文学部英文科に編入し、1955 年卒業。共同通信社文化部記者の傍ら、1964 年同人雑誌「犀」の創刊に参加し、同人の立原正秋、加賀乙彦、後藤明生らの知遇を得る。1966 年『北の河』で芥川賞受賞。『立原正秋』（毎日芸術賞）、『高らかな挽歌』（大佛次郎賞）など著書多数。1996（H8）年日本芸術院会員。日本文芸家協会理事長、日本近代文学館理事長も務めた。「時のながめ」（2015.10 新潮社）が最後の著作となった。

追悼　館蔵品展　高井有一展

平成２８年１０月２６日にお亡くなりになった新潮社記念文学館名誉館長で作家の高井有一氏を追悼する企画展です。高井氏は、１９６６（昭和４１）年に角館町（現秋田県仙北市）を舞台とした小説「北の河」で第５４回芥川賞を受賞。祖父田口掬汀（きくてい）の故郷で、自身も戦時中疎開した角館町との関わりは深く、しばしば作品の舞台として登場しました。

高井氏より寄贈された原稿や自筆資料を中心に、祖父田口掬汀、洋画家であった父田口省吾（せいご）に関する資料を加えた、館蔵品約５０点を展示します。

祖父と父との事

私の祖父田口掬汀は、一九四三年八月四日の暑い日に死んだ。父の田口省吾は十日遅れてこれも暑い盛りの日に死んだ。葬儀に集って呉れた人々の顔が、みんな汗に塗れてゐたのを、当時十四歳だった私は憶えてゐる。

それから早くも七十年が経ち、私自身が早逝と惜しまれた父の生年を倍も越える年齢になってしまったかと思ふと、正に往時茫々の感を免れない。

祖父田口掬汀は、明治の末に角館町から上京、家庭小説「伯爵夫人」「女夫波」等を書いて大衆の好みに投じ、派手な仕事ぶりを示した。大正期に入ってからは小説の筆を絶ち、美術雑誌「中央美術」を創刊して、美術批評家としても知られた。すべてについて強気の一生を貫いたと言はれる。

掬汀の次男に当る省吾は穏和な性格で、東京美術学校を出てから二科会員となり、一生穏やかな風景画、肖像画を描き続けて知友に愛された。

およそ性格の違ふ芸術家が暮す家に、私は小学校高学年まで育ったのだが、それに格別の影響を受けたわけではない。それでも、祖父と父とが時折交はした言葉の数々を、なつかしく思ひ出す事は今もある。

（平成２３年度企画展に寄せていただいた文章を再掲載）

①自筆原稿「北の河」　②自筆原稿「立原正秋」　③高井有一『時のながめ』（2015.10 新潮社）　④色紙「打ち寄せる 時の潮 往時茫々」
⑤田口掬汀　⑥田口省吾

※出品資料は都合により変更になる場合があります。ご了承ください。